
ハイデガーの「死への先駆的決意性」

おいも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイデガーの「死への先駆的決意性」

【Nコード】

N2941M

【作者名】

おいも

【あらすじ】

とある漫画家の、哲学を元にした漫画を小説にした。

ある日、ベンチャー企業に通うサラリーマンは、人生の折り返し地点をみる。

カツコツ

いつもどつりの、なにも変わらない朝、俺は会社に向かい、通勤していた。

そこで、俺はわけのわからないものを見た。

「え？」

折り返し地点？

「何だ？これ…」

通り過ぎようとした、その時だった。

「か、体が勝手にターンを…ターンしたら会社と反対方向に…」

ぐるぐる

「あれ……………」

全くわけがわからない。勝手にターンをしたと思ったら、俺は会社の方向を向いていつのだから

会社に着いたら、社長にこのことを話した

「お前も見たか、折り返し地点」

「社長も見たことあるんですか？」

「俺は七年前……四十五の時に見たよ。まだ家電メーカーに勤めてた頃だ」

驚くことに、社長も見たことがあるらしい。

「それまでは俺の人生、未来の可能性に満ち溢れていると無意識に思っていた。だから逆に日常をダラダラと過ごしてしまっていた。だが、折り返し地点を見たことで自分は人生のゴールに向かっている存在だときずいた。ゴールまで、このままだったらと歩き続けるわけにはいかない……切実になってそう思って、このベンチャーソフト開発会社を起こしたってわけだ」

と、自分に社長の折り返し地点を見た後のことを放してくれた

「しかし……お前、今いくつだ？」

「二十九です」

するとまた社長は口を開いた。

「二十九で人生の折り返し地点をみるというのはかなり早いな……まあ折り返し地点といっても別に人生の半分とか何分の一とか決まってるわけじゃないと思うけどな。田舎で黙々と農業を続けていた親父は七十九で他界した。その親父が折り返し地点を見たのは死ぬ三年前だった。お袋……つまり親父の妻が死んで……数日後、東京に帰っ

ていた俺のところ。和男、ワシは今、折り返し地点を見た！」といきなり電話をかけてきたと思うと…そこから去年まで、親父は怒涛の人生燃焼期間を過ごしていたよ。親父にとっては幸せな三年間だっただろうな…おふくろなんか最後の最後まで折り返し地点を見ずに逝ったんじゃないかな」

な、なんだろう…社長の言ってることがよくわからない…

「おつとすまん、一人で感傷的になって。現代の若い世代は『個人の生き方がいい』だとか『自分らしい生き方』みたいなものに敏感だから折り返し地点をみるのが速くなっているのかもしれないけどさ…それでもまだ六十〜七十%ぐらいしかにすぎないと思うよ。だから生きていても退屈しないほど日常は刺激的な娯楽に満ち溢れているし…お前の二十九つてのは早いよ。かなり早い」

「実は…」

社長の言いたいことは、どうして見ることになったのか、ということだろう。大まかの予想は…

「胃ガン!？」

「はい…人間ドッグで見つかりまして…かなり早い段階のガンだそうで…」

「治る!それなら治るよ!必ず治る。で?、手術はいつ?」

「二週間後です。今、製作中のソフトの完成まで関わられます。納期に間に合わせて、それからゆっくり手術を」

「そうか…くれぐれも無理はするなよ…」

本当は…医者にかなり無理を言って二週間後に引き延ばしてもらったんだが

病院で、検査をした

「それでは、検査をするのでそこで横になってください。」
といわれて横になる
検査が終わり、家に帰った。

ガチャリ、

「ただいま……………」

家に帰ると、そこには社長がいた。

「主治医の先生から連絡があつたよ。奥さんのためにもすぐに手術を受ける。仕事の方はほかの社員たちで何とかなる」

社長から、そのことを告げられた時、声が出なかった

そしてその夜、俺はおもった、早期ガンは大ウソで、実は相当進んでいたんだ　と。
眠れない俺は、外へ行くことにした。

居酒屋で、社長の言っていたことに対して、俺は考えていた。

『自分のゴールに向かって…親父は人生を燃焼…』

「ゴールって…俺の場合明確な死だろ…折り返し地点に来てみたら人生の九十九%が終わっていきなりどん底…って人間は燃焼しようじゃないか…火葬場で燃えるだけかあ？」

そんなことをつぶやいていたら、ひじに俺の飲んでいたビールの瓶が当たった。

ガタン、と倒れて中身が隣の若造にかかる

「うわっ！何やってんだこらア！」

俺はそれがしゃくにさわった

「うるせえクソガキ！！！！」

バキ！

俺はその若造に殴られ、倒れてしまった。

若造は店を変えた。

外は大雨、天から落ちてきた雨が、ぬらしても意味のない俺をぬらす俺は、そんな中で、こんなことを思っていた

これで終わりだ……

このまま死ねばいい……

地べたにはいつくばってる俺……

一気にどん底まで落ちた俺の人生そのものじゃないか……

雨は、まだまだ強く降る。

そこに、地べたから、とび場この踏み台が見えた。

……………何だ、そういうことが

「俺をぶざまにはいつくばせているのが地面なら……」

今まで俺は、何を考えていたんだろうか

「今まで俺を支えてきたのも地べたじゃないか……」

ぐぐと、地べたに両手をあてた

「俺を屈辱の泥まみれにさせているのが地べたなら……」

そしてその両手に、俺は力を入れる

「俺を飛躍させてくれるのも地べたじゃないか……!!」

あるはずのない、高い高い跳び箱を、俺はとんだ

「人生、九十九%から勝負だあああ!!……!!」

大きな雄叫びをあげて、俺は叫んだ。

雨は、俺の人生を現すかのように、まだまだ強く降っていた。

病院で診てもらった。

「うそ……………ガンが消えてる……………」

そして、俺はベットから下りた

「よっしゃあああつ！！！！」

「気持ちがポジティブになると免疫力が高まってガンが消失してしまつ症例があるのを聞いてはいたが……………」

人生、九十九%からだ！！！！

(後書き)

ハイデガー(1889～1976)は、初めて「在^ある」とは何か？を問うた哲学者である。それまでの手哲学は「私はどのようにしてあるのか？」とか「世界はどのようにして在るのか？」を何千年にもわたって考えてきた。「在る」ことそれ自体は自明とされ、デカルトも「我思う、故に我在り」以上はさかのぼって考えていない。

しかし、「自分が在る事そのもの」を問うと、人は不安に直面するという。合理的な説明などつくはずはないからだ。突然、この世に投げ込まれるようにして生まれた、だから自分は在る、ただそれだけ。そして、有限な肉体はいつか必ず、在ることを終わらせられる。なんとかつてな始め方、終わらせ方なのだろう……

だが、これがまさに生きるエネルギーになるとハイデガーは言う。死への不安もろとも全部自分を引き受け自分の意思で自分を未来に向けて投げ込みなおす決意がエネルギーになるのだ、と。

うああ哲学辞典、上より、抜粋

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2941m/>

ハイデガーの「死への先駆的決意性」

2011年1月19日07時21分発行